

一九〇年代初頭、土木系学科の大学院在学中の就職活動では、最初に大きな関門があった。「女子は採用していません」だ。たいの女子学生の眼中には工学部や土木業界はなかったし、そもそも学科の同級生は男子ばかりだった。業界も女性技術者の存在を認めていなかった。その頃から土木技術者女性の会、土木学会に関わってきた。「名前」がついたことで流れが大きく変わったと感じている。

企業が多様性（ダイバーシティ）に対して取りうる行動は四段階に分類される（谷口二〇〇五）。違いを拒否、回避する「抵抗」、違いに着目することは不公平とし他の人と同様であるのみならず「同化」、他の人と違うことに価値を置く「分離」、そして、異質なメンバー同士の相互触発が組織変革に不可欠であるとする「統合」である。これが時系列で進むとすれば二十数年前は違いのある人を拒否した「抵抗」か、男性と同じになるという条件で存在を認めた「同化」の時代であった。女性技術者は一般には認知されない、「名前はまだない」時代だ。

では、女性技術者が名前を得たのはいつ頃のことだろう。二〇一〇年頃に「ドボジョ」という名前を聞くようになった。土木技術者女性の会の仲間聞いたが起源は不明だ。全国土木系女子学生の会の学生たちが自分たちのことを呼ぶために使ったという説もある。でも、コミック『ドボジョ！』が出現し、この言葉は平成二

各 人 各 説

「けんせつ小町」の次

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻 研究員
(土木学会ダイバーシティ推進委員会 幹事長)

山田 菊子

Kiko Yamada-Kawai



十五年度国土交通白書にも取り上げられた。「土木」に関わる『女性』を省略した言葉の「ドボジョ」は中立的な名称だ。とても素敵なものがどうかは別として、とにかく名前が付き、土木に関わる女性が社会に存在することが認知された。

そして二〇一四年十月に「けんせつ小町」が登場する。日本建設業連合会が公募し、女性の選考委員のみなさんが選んだ名前と聞く。手もとにある岩波国語辞典第七版によれば「小町」は「評判の美しい娘」。現場でもどこでも、きれいと言われる女性でいたい、いてほしいの思いが反映されたのだろうか。

いずれにしても、女性技術者には「ドボジョ」や「けんせつ小町」という名前があった。建設業に関わる女性は、男性と違うことに価値が認められる「分離」の時代だ。

時代は「統合」へと進む。多様性の軸は数多くあり、そしてそのすべての軸がスペクトラムだ。白か黒かではなく、少しずつ違う濃さの灰色が繋がっている。男性と対比して女性であることを主張する必要のない時代がもうそこまできています。次の名前は「技術者」だと信じ、土木学会で「ダイバーシティ&インクルージョン行動宣言」（二〇一五年五月）の策定に関わった。みなさまにもぜひ一緒に話したい。

参考文献

谷口真美：ダイバーシティ・マネジメント、白桃書房、二〇〇五